

氏名(本籍)	ベッツィ ステラ フォレロ モントージャ (コロンビア)			
学位の種類	博士(学術)			
学位記番号	博甲第6294号			
学位授与年月日	平成24年7月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	The Constructions of Foreign Otherness in Japanese Media: Exploring the Discourse of Latinamericanness in Japan (日本のメディアによる他者性の構築：日本におけるラテンアメリカ的なものの言説をめぐって)			
主査	筑波大学准教授	博士(教育学)	海後宗男	
副査	筑波大学教授		仲田誠	
副査	筑波大学准教授	博士(国際政治経済学)	タック川崎 レスリー	
副査	筑波大学准教授	Ph.D.(社会学)	フォーシェ キャロル	

論文の内容の要旨

本研究は、日本における他者性の構築、特にメディアによる「ラテンアメリカ的なもの」(Latinamericanness)に関するエスニシティの構築とオートポイエーシスとの関連性を明らかにすることを目的とする。オートポイエーシス (autopoiesis = 自己創出、自己産出) は本来、生命の有機構成の本質、生命システムの本質を理解するための概念であるが、本研究においては、社会科学や思想分野で応用されているオートポイエーシスの概念を用いて考察している。オートポイエーシス・システムでは、諸構成要素が循環過程の中で相互作用し合い、自己の働きにより、システム維持に必要な構成要素を創出し、それにより他と区別できるシステムとして維持されている。生物などは自らの構成要素をシステム内部の働きだけによって産出するという意味で、それらは閉鎖性のあるオートポイエーシス・システムであるが、それに対する人間社会、特にメディアが関係する社会システムでは、構成要素がシステム外部からもってこられることによって、その維持・拡張、発展が続けられていることから、メディア社会システムは、開放的な、持続性のあるシステムとして捉えることができる。本研究は、日本のメディア社会システムを一つのオートポイエーシス・システムのケース・スタディとして捉え、日本のメディア社会システムの外部での他者性の構築が自己創出を維持し、開放的なシステムとして発展が続いていると論じている。

この論文は、オートポイエーシス・システム概念とあわせてカルティベーション理論(培養効果)に基づく考えも用いて、日本のメディアによる「ラテンアメリカ的なもの」の他者性を考察している。メディアによって大量伝達される情報内容がもつ構造は、客観的現実とは異なる独自の内容が構成されていることがある。カルティベーション理論によれば、メディア接触している人々では、社会において何が現実であるかという共有された現実感覚がメディアへの接触とその反復性や非選択性によって“培養”されていく。これにより、メディアに接触のある集団において共通の世界観、役割、価値観が生み出され、それは統計的なデータから得られる客観的な現実とは異なる、メディアによって描き出された象徴的(記号的)な現実により近いものになっていく。

本論文は、オートポイエーシス・システムの理論を背景に、カルティベーション理論に基づいて日本のメディア表現の中のラテンアメリカに関する制度過程分析（メッセージ・システム分析）を、定量的なデータを扱う内容分析的なアプローチと定性的なデータを扱うテキスト分析的なアプローチの両方を用いて行った。次に日本における人々の「ラテンアメリカ的なるもの」に関連する認識を調査し、定量的・定性的なデータを収集し、分析を行った。分析の結果、メディア表現の中の「情熱的な」そして「未開な」ラテンアメリカという紋切り型な言説が、人々のラテンアメリカに関する認識をつくりあげていることが検証された。一方で、ラテンアメリカ国籍の人々との直接の交流が、ラテンアメリカに関するメディア表現内容と異なる「ラテンアメリカ的なるもの」の認識を築くことがわかった。

本研究は、日本の高度に発展した近代社会という側面と単一民族国家的な自己概念が、日本におけるラテンアメリカのメディア表現方法を定着させたことと示唆している。「他者性」(Bhabha,1994)のプロセスに基づいて考えれば、日本と他国や他地域の文化・歴史・民族的な違いが固定されることにより、日本社会の等質的文化というアイデンティティが構築されてきた。本研究は、日本のメディアがこうした「日本的なるもの」の言説と「他者性」によってそのシステムを維持しつづけていく中で、ラテンアメリカ的なるものの創出に貢献してきたのではないかと示唆する。

審査の結果の要旨

本論文は、メディア社会システムをオートポイエーシスの更なる進化が可能な次世代システムとして捉え、日本における他者性の構築のプロセスと既存のメディア効果理論を合体させ、総合的に考察する先駆的な研究である。メディアによるラテンアメリカに関するエスニシティの構築とオートポイエーシスとの関連性を明らかにすることにより、「ラテンアメリカ的なるもの (Latinamericanness)」の言説の解明を丁寧に論じる力作となっている。

著者は、ニクラス・ルーマンの考えやジョージ・ガブナーの理論を本論文の研究テーマである「ラテンアメリカ的なるもの」に関する日本のメディア表現活動とその結果と関連づけるため、先行研究の文献調査において、真摯な努力を費やしている。それらの文献は、本論文における著者の主張を裏付ける重要な資料として論文全体において十分活用されている。このように、自らの研究に対して著者が示した熱意は、今後、研究者としての資質を示すものとして、高く評価できる。

また本論文は、実証的な手法に基づいて、日本のメディアの定量的なデータを扱う内容分析と定性的なデータを扱うテキスト分析を行い、更に調査等を通して定量的・定性的なデータ分析を行い、推測統計学を用いて、定量的・定性的研究法を乖離させることなく融合させた。その手法は特筆に値する。

本論文によれば、日本のメディアにおいて他者性が構築されつづけていることから、日本社会の自己創出メカニズムに他者性が統合され、それを基に日本社会というシステムの発展・拡張が続いている。つまり、日本は他者との識別によって自己アイデンティティがより強化され、日本社会がそれによって持続可能となり、オートポイエーシス・システムが維持されている。本研究は、メディアによる一方向の民族文化的な情報に関する培養効果だけではなく、メディア内容の再評価が常に求められる複雑なプロセスの一部としての日本のメディアによる他者性の構築を解明したことが本論文の大きな功績としてあげられる。これにより、本論文は、メディア・カルティベーション理論を用いたエスニシティのイメージ形成という従来の研究とは一線を画し、日本における「ラテンアメリカ的なるもの」の言説をめぐって新たな知見をもたらしている。本論文の手法は、今後日本における各エスニシティや各国を分析する際、その研究の範ともなりうるものである。

審査員からは、研究における「ラテンアメリカ的なるもの」の言説や他者性、オートポイエーシス・シス

テムの捉え方や提示された概念図、今後の研究の方向性に関する質疑や指摘があり、それらへの応答も含めて、本研究の主題や意義、独創性、有用性などについての著者からの解説があった。また、本論文の残された課題として、本研究の定量的な研究部分やオートポイエーシス・システムと「リアリティ」の関連性、他者性と日本における「ラテンアメリカ的なもの」に関する独自の視点やさらに深い考察の余地があるだろう。しかしこれは、本論文の高い学術的価値ゆえに期待される今後の課題であり、著者の洞察力や研究者としての将来性がこの論文に示されているとの指摘があった。

平成24年5月22日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。